

(論文)

## エスニシティの多様化と新たなマオリ概念の展開

岐阜大学

杉原利治

### 1. はじめに

先に筆者は、社会の持続可能性の観点から、マオリによるマオリのための社会サービス組織、マオリ・プロバイダーが、マオリ社会に対してもっている意味<sup>1)</sup>について述べた。また、エスニシティの多様化がすすむワイタケレ市におけるマオリの活動<sup>2)</sup>、そして、マオリによる新しいマオリ教育<sup>3)</sup>についても報告した。これらはいずれも、都市化、さらにはグローバル化がすすむ中で、彼らが、自らの位置を確かめ、マオリのやり方を築きあげようとする実践を取りあげたものである。そして、都市マオリのこのような活動は、その内に、「マオリとは？」という問いかけを孕んでいることを指摘した。

「マオリとは誰か？」は、ニュージーランドにおける古くて新しい問題である。マオリ概念、特に、人口調査におけるマオリの扱いについては、青柳、内藤<sup>4, 5)</sup>によって詳細に述べられている。ニュージーランドでは、当初、人々にとって、イウィ間の違いが問題であり、マオリという概念は必要ではなかった。ヨーロッパからの移住者が増加するに従い、自らを相対化するため、普通の人を意味するマオリという語が使われはじめた<sup>6)</sup>。そして、パケハとの抗争、同化政策による生活の近代化、さらには近年の都市化は、マオリにアイデンティティの希薄化をもたらした。また、マオリ以外の人々との通婚は、マオリをエスニシティ多様化の波に巻き込んだ<sup>7)</sup>。そして今、このような変化は、マオリ・アイデンティティ、マオリ・エスニシティの問題をあらためて浮かび上がらせてきたのである。

本研究では、若いマオリ研究者による新しいマオリ観を紹介し、エスニシティの多様化がすすむニュージーランドにおけるマオリ概念とその行方を考察したい。

### 2. 人口統計とエスニシティの多様化

人口統計において、マオリを数える場合、かつては、レイス、あるいは血といった、生物学的な指標が用いられていた<sup>4, 5)</sup>。1874-1921年は、ハーフカースト(1/2 混血のマオリ)カテゴリーが用いられ、1926年からはさらに詳細な血の割合が使用された<sup>8)</sup>。この方法は、半世紀にもわたって続いたが、血の割合を求めることの困難さ、血の割合によってマオリを区別することへの反発などにより、1980年代以降、血やレイスではなく、文化的な側面を重視したエスニシティが主流となった。しかし、レイスの概念が完全に消滅したわけではない。人口統計では、同時に、マオリを先祖にもつかどうか、そしてさらに、イウィに属しているかどうかも聞いている。これらは生物学的要素であることに変わりはない。

一方、エスニシティに関しては、1986年、エスニックオリジン、1991年度からはエスニックグループの概念が導入された。エスニシティについては多くの考え方があり、国々の事情、各個人の立場によっても異なる<sup>9)</sup>。ニュージーランド統計局は、個人のエスニシ

ティに影響を及ぼす要素をいくつかあげている<sup>10)</sup>。名前、先祖・血筋、文化、住む場所と社会的文脈、レイス、生まれた国・国籍、市民権、宗教と言語。そして、人口調査票（2006年）では、エスニックグループを、次のうちのいくつか、あるいは、すべてを備えた人々から成り立つ集団と定義している<sup>11)</sup>。a) 言語、信念、習慣、伝統的やり方など共有の文化、b) 共通の祖先や歴史、c) 類似の地理的起源や部族、一族の出自。

しかし、調査にあたって、本人が、このような事柄を十分に理解して、自己のエスニックグループを決め、質問紙に記入できるとは限らない。したがって、質問の仕方によっては、データに変化や偏りが生ずる。1986-2006年までの統計調査における質問形式の変遷は以下のようなものである<sup>12), 13)</sup>。

1986年 Which is your ethnic origin? Tick the box or boxes which apply to you.

1991年 Which ethnic group do you belong to? Tick the box or boxes which apply to you.

1996年 Tick as many circles as you need to show which ethnic group(s) you belong to.

2001年 Which ethnic group do you belong to? Mark the box or boxes which apply to you.

2006年 Which ethnic group do you belong to? Mark the space or spaces which apply to you.

1991、2001、2006年はほとんど同じ形式の質問であるが、1996年度は、複数のエスニックグループの記入を促す形式になっている。そのため、この年は、多重エスニシティを選ぶ人が急増した。したがって、人口統計を時系列的に議論するとき、1996年データの解釈に注意を促したり、この年のデータを除く場合がある。逆に、ニュージーランドが多様な社会であることを重視すべきとして、1996年度の質問形式の方を積極的に評価する立場もある。多重エスニシティの変化をみると、NZ全体では、1991年度の5.0%から、1996年度に15.5%へ急増した後、2001年、9.0%へと減少し、2006年には、10.4%となった<sup>12), 13)</sup>。マオリについては、1991-2006年の5年毎の多重エスニシティの値は、15.5、47.8、44.0、48.8%である。また、ニュージーランド全体の子供（0-14才）については、19.3、45.2、34.2、38.1%である<sup>8)</sup>。

表1 各種のマオリ人口<sup>13), 14)</sup> (SM(%)は対EM、EM(%),IM(%)は対AMの値)

	1991年	1996年	2001年	2006年
SM	323998(74.5%)	273438(52.2%)	294726(56.0%)	289500(51.2%)
EM	434847(85.1%)	523374(90.3%)	526281(87.1%)	565329(87.8%)
IM	368655(72.1%)	425745(74.4%)	454479(75.2%)	541611(84.1%)
AM	511278	579714	604100	643977
NZ 全人口	3373926	3618303	3737277	4143279

SM；単一エスニックマオリ（マオリのみを答えた集団）、EM；エスニックマオリ（単一回答と複数回答を合わせたマオリ集団）、IM；イウイマオリ（自分のイウイを知っている集団）、AM；祖先マオリ（マオリを祖先にもつ集団）。

このように、技術的問題はあるけれども、ニュージーランドでは、20 世紀末から 21 世紀初頭にかけて、エスニシティの多様化がすすんだのは事実である。エスニック多様性は、グループ別には、マオリと太平洋民で、世代別には、若い世代で大きい。マオリについてみれば、他のグループほど質問形式の影響を受けず、1996 年以降、複数のエスニックグループに属すると答えた人は、4 割をこえている。つまり、エスニシティの観点からすれば、マオリをエスニックグループに選んだ人々のうちで、約半数しか、純マオリはいないことになる。このようなエスニックグループ内での多様性は、どのグループにおいても見られるが、マオリにおいて特に顕著である。マオリについての人口統計データを表 1 に示す。いくつかのマオリ人口が調べられているが、その大きさは、祖先マオリ>エスニックマオリ>イウィマオリ>単一エスニックマオリの順である。単一エスニックマオリは、エスニックマオリの一部である。また、質問の構成上、イウィマオリは、常に、祖先マオリに包含される。しかし、マオリ集団間の他の関係はまだ明確にはなっていない。

人口統計における多重回答の増加は、データの解釈を複雑で困難にしている。そこで、ニュージーランド統計局は、多重回答を優先化によって単一回答へ変換する操作を行ってきた。優先化は、マオリ>太平洋民>アジア人>その他の集団（ヨーロッパ人を除く）>ヨーロッパ人の順である。しかし、この方法は恣意的であり、多重エスニシティが増えるにしたがい、データを変形させる度合いが大きくなる。特に、若い世代や太平洋民のデータをゆがめてしまう。

そこで、ニュージーランド統計局は、2004 年、これまでの方法を総括し、機械的な優先化処理以外の方法をいくつか提案した<sup>10)</sup>。a) 全エスニック数を報告する。b) 人々が自ら優先化を行い、主エスニシティを選ぶ。c) 乱数によって優先化を行う。d) エスニシティ分率モデルを用いる。e) 主エスニックグループを予測できるシステムの開発を行う。

2006 年人口調査では、このうちで、a) 全エスニック数を報告する方法がとられた。しかし、全数データではエスニック集団の実態が隠されてしまい、多重エスニックグループのなかに潜む意味を見出し難い。また、2006 年度には、エスニックグループとしてのニュージーランダーの急増<sup>15)</sup>という事態も起こっており、エスニシティ多様化をめぐる問題は、今後、ますます大きくなるだろう。

### 3. 多重エスニシティの自己優先化

これまでの人口統計調査におけるエスニックデータの主要な問題点は、次の 2 点である。

- (1) 多重エスニシティの増加に対して、統計処理をどうするか。
- (2) エスニックデータをどう活用するか。特に、多様性の大きなマオリ・エスニックデータをどのように活用するか。

Tahu Kukutai は、エスニシティの多様化を前提にして、人口統計データを、マオリが被っている社会経済的不平等の解決に生かすにはどうしたらよいか、すなわち、統計データをマオリ政策へ反映するための方法を提案している<sup>16), 17)</sup>。その基本的立場は、「マオリを祖先にもつ人すべてが、不平等な状態にあり、不利益を被っているわけではない」とい

うものである。その上に立って、2つの非常に重要な結論を導いている。

(1) マオリ・エスニックグループは一様ではない。多重回答者の多くは、自己優先化によって主エスニックグループを決定することができる。

(2) マオリの定義は、祖先だけではなく、祖先とエスニシティの両方でなされるべきだ。その際、自己をマオリとして強く規定する人々が、マオリとして救済されるべきだ。

前者は、上述の2004年エスニシティレビュー<sup>16)</sup>における提案の一つ、エスニシティの自己優先化が可能なことを実証したものである。後者は、エスニシティと祖先データを組み合わせてマオリを再定義しようとするものである。

Kukutai は、20-59歳の女性3000人以上を対象とした調査で、多重回答者の主要エスニックグループへの帰属が可能かどうかを調べた<sup>16)・17)</sup>。やり方は、まず、人々に該当するエスニックグループをいくつでも答えてもらい、複数の回答をした人には、そのうちで最も強く帰属するエスニックグループを決めてもらった。その結果、多重回答者の内、約8割の人々が自己優先化によって主エスニックグループを決定することができた。マオリ多重回答グループでは、2/5がマオリを、2/5が非マオリを第一エスニックにえらび、残り1/5がどちらでもないと答えた。また、同様の調査を、エスニック多様化が著しい若い世代に対しても行った<sup>8)</sup>。若者(10-14歳)2000人以上を対象に、エスニシティの自己優先化が可能かどうかを調べたところ、多重回答をした若者の3/4が、主エスニックグループを決めることができた。多重回答で一番多かったのはヨーロッパ人/マオリであり、このうち、54%がヨーロッパ人、44%がマオリを主エスニックと答えた。これは、先の女性についての場合と類似の結果である。

さらに、Kukutai は、この女性集団について、家族、教育、職業など社会経済的状況とエスニシティとの関係を分析した。多重ロジスティック回帰分析法を用いて解析を行った結果、マオリと非マオリの両方を答えた女性の内、マオリを優先した人々の社会経済的状態は、マオリのみを答えた人々と同じ傾向にあることがわかった。すなわち、マオリの内でも、エスニックアイデンティティの強い女性が、社会経済的に不利な状況にあることを、統計学的手法を用いて証明したのである。

この方法は、マオリ・エスニックグループを単一マオリと混合マオリの2つにわけ、両者の社会的状況を比較したChappleの研究<sup>18)</sup>より、はるかに優れている。なぜなら、自己申告によって決定されたマオリ・エスニシティの強さによれば、純マオリと混合マオリのようなおおざっぱな二分法では把握できないエスニシティのダイナミズムをつかまえることができるからだ。

このようにKukutai は、エスニックマオリは均一ではないこと、そして、複数のエスニックグループに帰属する人の多くが主要なエスニックグループ(主マオリ集団)を決定することができることを示した。さらに彼女は、エスニシティの観点から、単一マオリに主マオリを加えた集団が本来のマオリであり、いかなるマオリの定義も、マオリ祖先とこのようにして決定されたマオリ・エスニシティの両方を含むべきであり、限られた資源は、両方を満足する人々に配分すべきだと主張する。

#### 4. マオリのアイデンティティ

「マオリとは誰か？」という問いは、多民族国家ニュージーランドにおける人口統計上の主要課題の一つである。そしてまた、マオリにとっては、先住民としての権利回復に大きく関係してくる重要な問題である。ニュージーランドでは、人口動態のような公式統計は、自己申告によるエスニシティを使用しているが、法的には、マオリの祖先をもつことが、マオリかどうかを決めている<sup>19)</sup>。その基になっているのは、マオリの伝統的概念、ファカパパ (whakapapa) である。ファカパパは、マオリの血をもっているだけでなく、祖先と系統的な関わりを持つことを表している。したがって、マオリの祖先をもつことは、ファカパパが定まるための必要条件である。

マオリ運動のリーダーPita Sharplesは、ファカパパについて次のように述べている<sup>20)</sup>。「“おまえはどの程度マオリなんだ。”我々の血を分割しようとする邪悪な考えが、我々の最も大切な価値、ファカパパ (われらの家系) の目の前を飛び交っている。ファカパパは、すべてを語ってくれるのだ。我々はどんな祖先から由来し、我々に続く人々に対してどんな責務を負っているかを。」

ファカパパがマオリにとって第一義的に重要であるとの見解は他にも多い<sup>21) 23)</sup>。

ファカパパは、多様化するマオリ社会において、マオリとは誰であることを明確に規定する。しかし、マオリのなかには、マオリの祖先はもっていても、係累をたどることができない人やファカパパについてよく知らない人が増えている。ワイタング条約がらみでマオリが権利を主張する場合、イウィをはじめとする部族集団が窓口になることが多い<sup>24)</sup>。そして、イウィメンバーとなるためには、ファカパパの証明が求められるケースがほとんどである。それが不可能な場合には、原則としてマオリの権利から排斥されることになる。都市化によって、このようなマオリはかなりの割合で存在している。人口統計データ (表 1) によれば、祖先マオリのうちで、自分のイウィを知らない人々は、2001年 25%、2006年 16%である。

一方、エスニシティに関しては、統計学的データの域をなかなか出なかった。しかし、健康、貧困、教育などについては、エスニックデータに依拠するケースがしだいに増えてきている。教育や健康サービスを提供するマオリ・プロバイダーなどでは、祖先よりも自己決定エスニシティを基盤とするものも出てきた<sup>1)</sup>。

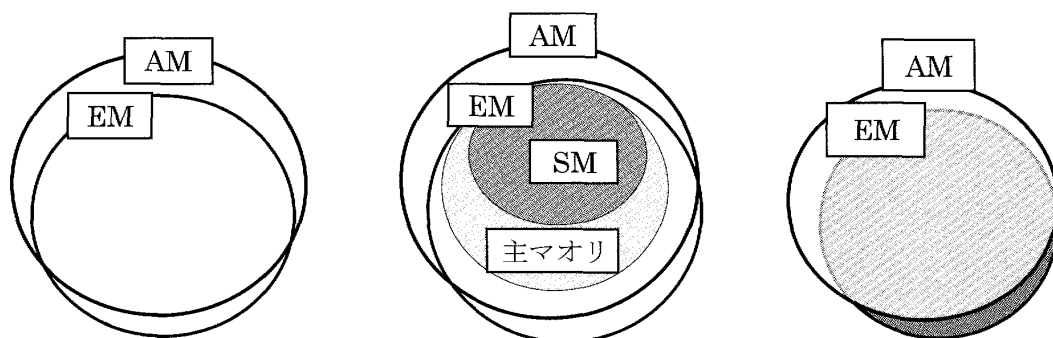
問題は、マオリにとってエスニシティとは何かである。マオリのアイデンティティやエスニシティを決める要素については、これまでも様々な議論がなされてきた。1960年代には、マオリ度 (degree of Maoriness)<sup>25)</sup> やマオリらしさ (Maoritanga)<sup>26)</sup> が議論され、1990年代に入ると、具体的な文化、言語、宗教、ネットワーク<sup>27)</sup> 等とマオリ・アイデンティティの関係を探ろうとする動きが盛んになってきた。これらには、テ・フェヌア (te whenua、大地)、テ・レオ (te reo、言語)、マラエ (marae) 等とともに、祖先やイウィ、ファナウ (whanau、拡大家族)、ファカパパなど生物学的要素が含まれている<sup>6) 28) 30)</sup>。さらに、マオリの伝統的価値観として、ファナウンガタンガ (whanaungatanga、人々の広範なつながり)、ウツ (utu、互惠主義)、マナ (mana、権威)、マナキタンガ (manakitanga、

気づかい) などがあげられる<sup>31)</sup>。注目すべきは、近年のマオリ指標の開発が、文化的要素と生物学的要素の両方を統合しようとの立場でなされていることである。このうち、マッセイ大学グループによるもの<sup>28) 30)</sup>は、4つの軸（人間関係、マオリ文化アイデンティティ、社会経済、時間変化）を基にして、マオリ・アイデンティティを構成する7つの要素（マオリ自己規定、ファカパパ、ファナウ、マオリ語、人々との交わり、マラエ活動、祖先土地の権利保有）の得点化によってマオリ・アイデンティティを指標化するものであり、マオリの健康や貧困に対して応用がなされている。このプロジェクトは、10年以上の長期にわたる大規模なものであり、今後の成果が期待される。

## 5. 人口統計と新しいマオリ概念

マオリ・アイデンティティについての議論がすすむ一方で、ニュージーランド人口統計において蓄積されてきた、祖先マオリとエスニックマオリのふたつのマオリ人口データは独立したものとされてきた。

このようななか、ニュージーランド統計局、Cyril Mako は、1998年、人口調査の祖先マオリとエスニックマオリの関係に関して問題提起を行い、エスニックマオリのすべてが祖先マオリに含まれるわけではないことを指摘した<sup>32)</sup>。それから5年後の2003年、この問題に正面から取り組み、マオリを定義する場合にはエスニシティと祖先を同等に考慮すべきと述べたのが Kukutai<sup>16)</sup>である。さらに彼女は、マオリ・エスニックグループの中でも、特に、単一マオリと自己優先化による主マオリを合わせた集団（強いエスニックのマオリ）をマオリとして定義すべきだと主張する。しかし、非常に大胆な提言を行っている Kukutai ですら、マオリであるためには、マオリ祖先をもつことを条件としている。その前提に立って、マオリ祖先をもつ人々であっても、マオリ・エスニシティをもたない人は、マオリに数えるべきではないと言うのだ。



マオリ集団間の関係(Mako)    マオリの再定義(Kukutai)    法的マオリ概念の提案 (Coats)

図1 人口統計データとマオリの定義（各マオリ集団の略号は表1に同じ）

しかしながら、最近、さらに根源的な問題提起を行う若い研究者が出現した。Natalie Coats は、これまで、マオリであることについて自明の理とされてきた、祖先マオリに疑問を投げかけたのである<sup>33)</sup>。彼女は、法律とマオリ・エスニシティとの関係を根本的に議

論した。そして、エスニックデータもマオリの法的基準に入れるべきとの提案を行ったのである。その際、祖先カテゴリーによっては非マオリであっても、文化的に自分をマオリとして申告した人々をマオリから排除すべきではないと主張する。その中には、マオリと結婚した非マオリの配偶者だけではなく、マオリに縁者をもたないけれども、言語や習慣などマオリ文化に精通し、なおかつ、自分をマオリと規定する人が含まれる。これらの人々は、1991、1996、2001、2006 年度、エスニックマオリ集団に対して、それぞれ、9.6、7.1、7.4、1.9%と、常にある割合で存在している<sup>13、17</sup>。Coats のこの考えは、画期的である。なぜなら、Kukutai も含めて、祖先マオリがマオリであるための条件であるとする、これまでの伝統的マオリ概念をくつがえすものであるからだ。ニュージーランドでは、マオリ祖先をもつことが、法的にマオリの基本権利を保障するマオリ概念であった。しかし、Coats は、マオリ祖先をもつ、もたないにかかわらず、エスニックマオリを法的範疇に入れるよう主張しているのだ。以上、3 人の指摘、主張、提案を、図 1 に模式化して示す。

このように、20 年以上にわたってなされてきたニュージーランド人口統計調査は、エスニシティの多様化を契機にして、あらたな展開段階に入ったといえる。各種マオリデータの相互関係を明らかにし、マオリ多様性のもつ意味の理解をさらに深めることが、多民族国家ニュージーランドにおいて、エスニックデータの有効活用への途をひらくだろう。

## 6. 結語

ニュージーランドでは、生物学的要素が強いレイスよりも文化的に決定されたエスニシティの方がよいという認識が一般的になりつつある。この国はまた、世界的にも、多重エスニックデータを公式にとりはじめた最初の国の一つである。その結果、エスニシティ多様化の問題が顕著となり、統計データの解釈が難しくなると同時に、「マオリとは何者か？」という問いが浮上した。そして、データ処理と分析の仕方に新たな方法の開発<sup>34</sup>が必要となってきたのみならず、マオリの再定義も促されている。

多様化の観点からすれば、血によってマオリを分けようとした、かつての人口統計の方法は、血の割合を問わない、祖先マオリというかたちで単一化されたともいえる。一方、エスニックカテゴリーは、もともと複合的な文化概念であり、エスニシティを規定する多くの要素によって、その多様化、複雑化は避けられない。

そんな中、マオリ新世代とも言うべき若い研究者達が登場してきた。エスニシティ多様化のなかで育ってきた彼女達は、マオリ運動昂揚期後の世代であり、冷静で客観的な判断と新しい発想を備えている。そして、「マオリとは何か？」という根源的問いかけを行いながら、情緒的、政治的表現よりも、データに基づく客観的な方法によって、多様化の中にあるマオリの重要課題に取り組み始めている。

エスニシティは、人口統計上の問題のみならず、ニュージーランドの社会政策とも直接関係する事柄である。今後、マオリ概念がさらに深化し、人口統計に生かされるならば、エスニシティデータはマオリ社会の福祉向上に寄与するだろう。その際重要なのは、エスニックな実態としてのマオリ社会、すなわち、独自の文化をもったマオリ社会の構築がす

すむことである。それは、都市化、グローバル化した現代において、生活レベルでツィカンガマオリ (tikanga Maori、マオリのやり方) をつくりあげることであるともいえるだろう。そして、それはまた、ワイタンギ条約以来、近代化と伝統的アイデンティティの狭間で揺れ動いてきたマオリが、多様なニュージーランド社会のなかで、21世紀のマオリ像を自らの手で明確にしていく営為でもあるだろう。

## 文献

- 1) 杉原利治、マオリ・プロバイダーと持続可能性、日本ニュージーランド学会誌、14 巻、26-38、2007
- 2) 杉原利治、持続可能性と多様性ーエコ都市ワイタケレにおけるマオリー、岐阜大学教育学部研究報告(人文科学)、52 巻 2 号、309-338、2004
- 3) 杉原利治、マオリ教育の新しい潮流ー持続可能な社会と教育ー、岐阜大学教育学部研究報告(人文科学)、53 巻 2 号、97-117、2005
- 4) 青柳まちこ、マオリとは何か、ニュージーランド研究、9 巻、1-12、2002
- 5) 内藤暁子『国勢調査の文化人類学、第 21 章ニュージーランド』pp.383-397、青柳真智子編、古今書院、2004
- 6) Broughton, J., Being Maori, *New Zealand Medical Journal*, 106, 506-508, 1993
- 7) Callister, P., Ethnicity Measures Intermarriage and Social Policy, *Social Policy Journal in New Zealand*, 23, 109-140, 2004
- 8) Kukutai, T., A "Main" Ethnic Group? Ethnic Self-prioritization Among New Zealand Youth, *Social Policy of New Zealand*, 36, 16-31, 2009
- 9) 青柳まち子編『エスニシティとは何か』新泉社、1996
- 10) Report of the Review of the Measurement of Ethnicity, Statistics NZ, 2004, <http://www.stats.gov.nz>
- 11) Individual Form, New Zealand Census of Population and Dwellings, Statistics New Zealand, 2006, <http://www.stats.gov.nz>
- 12) Lang, K., Measuring Ethnicity in New Zealand Population Census, Statistics New Zealand, 2002, <http://www.stats.gov.nz>
- 13) Cormack, D., *Hauora: Maori Standards of Health IV. 2. Maori Population*, 11-20, 2008
- 14) Quick Stats About New Zealand Dwellings, Statistics New Zealand, 2009, <http://www.stats.gov.nz>
- 15) Kukutai, T., Didham. R., In Search of Ethnic New Zealanders: National Naming in the 2006 Census, *Social Policy Journal of New Zealand*, 36, 46-62, 2009
- 16) Kukutai, T., The Dynamics of Ethnicity Reporting: Maori in New Zealand, Te Puni



Kokiri, Wellington, 2003, <http://www.msd.govt.nz/documents/>

- 17) Kukutai, T., The Problem of Defining an Ethnic Group for Public Policy: Who is Maori and Why does it Matter ?, *Social Policy of New Zealand*, 23, 86-108, 2004
- 18) Chapple, S., Maori Socio-economic Disparity, *Political Science*, 52, 101-115, 2000
- 19) 一例をあげるなら次のような法律がある。The Maori Affairs Act 1953, the Administration Act 1969, the Adoption Act 1955, the Electoral Act 1993, the Maori Affairs Restructuring Act 1989, the Maori Community Development Act 1962, the Income Tax Act 1976.
- 20) Sharples, P., "Identity Cannot Be Measured in Parts", *New Zealand Herald*, September 29, 2006
- 21) Durie, A., "Te Aka Matua: Keeping a Maori Identity", In P Te Whautu, McCarthy, M., & Durie, A.,(eds.), *Mai i Rangiatea: Maori Wellbeing and Development*, Auckland University Press, 1997、 pp.142-162
- 22) Metge, J., *New Maori Migration Rural and Urban Relationships in Northern New Zealand*, Victoria University Press, 1964, p.53
- 23) The Waitangi Tribunal, Report of the Waitangi Tribunal on the Te Reo Maori Claim, p.14, 1986
- 24) 深山直子、ニュージーランドの海は誰が所有するのか—前浜及び改訂の法的位置づけを巡る問題と先住民マオリ—、日本ニュージーランド学会誌、14 巻、18-25, 2007
- 25) Ritchie, J.E., *The Making of a Maori*, A.H. and A.W.Reed, Wellington, 1963
- 26) Reed, A.W., *Illustrated Encyclopedia of Maori Life*, Reed, Wellington, 1963
- 27) Reitz, J., and Sklar, S., Culture, Race, and Economic Assimilation of Immigrants, *Sociological Forum*, 12, 233-277, 1997
- 28) Durie, M., Te Hoe Nuku Roa Framework, A Maori Identity Measure, *Journal of the Polynesian Society*, Vol.104, 461-470, 1995
- 29) Durie, M., Te Mana, *Te Kawanatanga - The Politics of Maori Self-Determination*, Oxford University Press, pp.52-59, 1998
- 30) Stevenson, B., Te Hoe Nuku Roa: A Measure of Maori Cultural Identity, *He Pukenga Koreo*, Vol.8, No.1, pp.37-45, 2004
- 31) Coats, N., Kia Tu Ko Taikana: Let The Heartwood of Maori Identity Stand, *Dissertation*, University of Otago, 2008, <http://eprintstetumu.otago.ac.nz/67/>
- 32) Mako, C., Some Statistical Issues for Maori - Definitions and Applications, *Te Oru Rangahau - Maori: Research and Development*, School of Maori Studies, Massey University, pp.45-50, 1998
- 33) Coates, N., Who are the Indigenous People in Canada and New Zealand, *Journal of South Pacific Law*, 12, 49-55, 2008

- 34) Callister, P., Didham, R., and Kivi, A., Who Are We? The Conceptualization and Expression of Ethnicity, *Official Statistics Series*, Vol.4, 1-56, 2009,  
<http://www.stats.gov.nz>

## **Ethnic Diversity and Innovation in Maori Definition**

Gifu University

Toshiharu Sugihara

In New Zealand ethnic diversity has become conspicuous especially among Maori people because of the intermarriage and urbanization. Though some proposals by Statistics NZ have been made to deal with the complexity of the ethnic data in the Population Census, a good method has not yet been developed. Meanwhile, innovative Maori definitions have been made by young Maori researchers in relation to the two Maori populations in the Census: ethnic Maori and ancestry Maori. Tahu Kukutai has verified that Maori ethnic group is not uniform and multi-ethnicity can be simplified by a self-prioritization through a large survey of Maori women or Maori youths. She asserted that any definition of Maori should contain both self-identified ethnicity and descent. Another young Maori researcher, Natalie Coats, argues that ethnicity should be taken into account in the legal definition of Maori where having a Maori ancestry has been prerequisite. The idea contradicts not only the legal definition but the traditional concept of Maori (whakapapa). As well as these innovative definitions of being Maori, Maori society should be substantiated ethnically which could be attained through tikanga Maori in a daily life in order to make the best use of the ethnic data for the welfare of Maori.